

ジイジ・バアバ、
パパ・ママへ贈る

心 の め ば え

<29>

著者／牟田 泰三
挿絵／橋本 礼子

5歳2カ月
憎まれ口

幼児も5歳頃になると3歳頃に見られた可愛らしさがだんだん薄れてきて生意気になり、憎まれ口をきくようになるとよくいわれる。アヤもその年頃に差しかつてきたのだから。幼稚園などで友達と遊んでいるうちにどんどん知恵がついて、大人から見ると幼さが見えなくなってきた、生意気なように見えるのであろう。

アヤがテレビで子供番組を熱心に見ているとき、バアバが話しかけると、
「バアバ黙って、集中できないから」
などと生意気なことを言う。

アヤはピアノが好きだ。自分の音感を頼りに「かえるの歌が…」などと弾いている。ジイジがそばで聞いていると、

「ジイジは部屋の外で聞いて。気が散るから」
と言って、ジイジを部屋から追い出してしまふ。

バアバが上着のポケットのことを「プレザー」などと言うと、すかさず「プレザーだよ」と訂正が入る。ジイジが

「あのぴよんぴよん跳ぶものは面白かったね」
と言うと

「トランポリンでしょ」と厳しく直される。

バアバが、時々、前に言ったことをまた言ったりする。すると

「もうそれは聞いた、何度も言わないで！」

と言う。確かにその通りではあるが、大人だったら、2、3度ぐらいは聞き流すぐらいの気配りというものがあるものだ。

子供は中学生ぐらいになると反抗期を迎えるときよくいわれる。この時期、親に反抗している子供は確かにたくさんいるようだ。私自身はというと、とんとそのような記憶がない。親に従順だったとは思わないが、親があまりあしろこうしろと言わなかったからかも知れない。

幼児の場合はどうであろうか。発達心理学でどう説明されているのかはよく知らないが、大人に対して逆らう時期があるのではないだろうか。これまで

ジイジ「絵本を見ようか」

アヤ「うん。見よう」

で済んでいたことが、

ジイジ「絵本を見ようか」

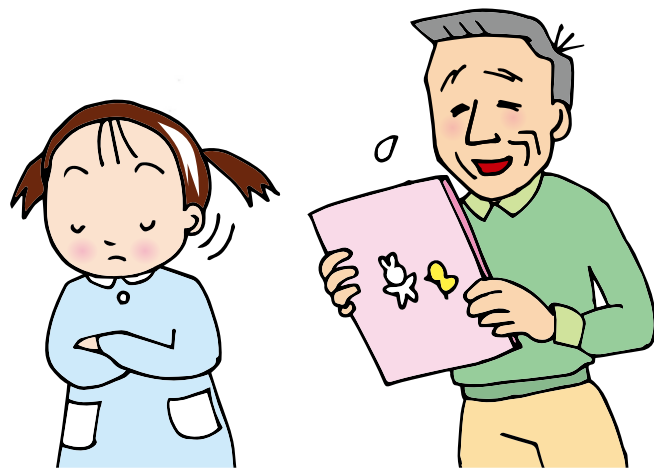
アヤ「嫌だ」

という調子になる。それでも、これを2、3度続けると「見る」ということになるのであるが、一旦は逆らう姿勢を見せる。反抗とか憎まれ口とかいうよりは、口癖とでもいった方がいいかもしれない。それでも、

ジイジ「チョコレート食べる？」

アヤ「うん」

と、大好きなものには逆らえないようだ。



ジイジの
気付き



アヤの心の理論が、他人の間違いを許すところまで進化するのはいっただろ。

「心のめばえ」のバックナンバーは、牟田のホームページでも読むことができます。下のQRコードをスマートフォンなどで読み取ると簡単にアクセスできます。



ジイジへのお便り

エッセーを読んだ感想などを、お寄せください。
weekly@presnet.co.jp
「心のめばえ」係へ

プロフィール 　むた・たいぞう　1937年、福岡県生まれ。九州大学理学部卒業、東京大学大学院物理学専攻修了、理学博士。京都大学助手・助教授、広島大学教授・学長、福山大学学長などを歴任。主な著書に「語り継ぎたい湯川秀樹のことば」（丸善出版）、「電磁力学」（岩波書店）、「量子力学」（裳華房）などがある。東広島市在住。